

鶴竜引退・照ノ富士復活 この先どうなる大相撲  
大相撲 3 月場所観戦印象雑記

◆はじめに

鶴竜休場、もはやこれまでと置いていたら案の定場所中に引退を表明。白鵬は復調を感じさせる相撲を見せ始めたが、序盤戦を乗り切る前に休場。

これまで「次は引退勧告か？」と騒ぎ始めたマスコミも「言葉の刃」を治めてしまい、思いの外静かに報道された。また相撲協会も注目を浴びることがないように、やや沈黙気味。それもそのはず、三人そろえた大関は勝ち越しもままならぬ状態で、両横綱の後継者の目処がたっていない。

◆さて、賜杯の行方は？

白鵬が早々と退散してしまった後は、多くの人が注目するところは「照ノ富士の大関復帰はなるか？」に移ってきた。照ノ富士が、やや粗雑な取り口でもたついている内に飛び出してきたのが高安。

「大関陥落組の関脇と小結が優勝争い」と、マスコミも巷も騒然とし始めたのだが……。

終盤になって高安の墓穴を掘るような取り口ばかりが目立ち、星二つを逆転されて照ノ富士の優勝を許した上に、自らも 10 勝 5 敗という平凡な成績に終わった。

照ノ富士の 15 日間の相撲の中には、相変わらず、腰高で、振り回すような乱暴な取り口や、下りながら繰り出す技なども散見したが、これまでと違う技巧的な場面を見せる取り口も目立っていた。立ち合いに踏み込んで素早く前みつをとることとすぐに引きつけること、差し手は差したらすぐにかえすこと、上手は下から取りに行き引いたら脇を固めるなどの型を身に付けてきたのが、復活後の特長と見ている。これらは、技能派力士だった師匠の伊勢ヶ浜(元旭富士)や安治川親方(元安美錦)の指導や助言の成果と思われる。

◆新しい力を眺めてみる

今場所の見所は、優勝争いよりも、「若い力・新しい力の台頭」にあったような気がする。

西関脇に昇進して 3 場所目の隆の勝は、膝と腰の構えができていて、いつも顎を引いて頭から相手に対峙しており、これまでよりも「どっしり」した感じがしてきた。引きや叩きに強いのは豊富な稽古量の賜物に違いない。序盤を 1 敗で抜けて、中日を終って 5 勝 3 敗とかなり期待を抱かせるような出来栄だったが、終盤失速気味で千秋楽に辛うじて勝ち越しすることができた。土俵に根を生やしたような低く安定した態勢で、しかもすり足がきちんと出来ていて、見ても安心感がある。来場所以降に色々期待できそうな気がした。

東 2 枚目の北勝富士の相撲も光るものが多かった。頭であたり、低い姿勢を保ちつつ、脇を締めた鋭いおっつけて下から上へとグイグイ攻めていく相撲は、他の力士にはない特技で、上位力士の脅威になっている。この地位での 9 勝 6 敗は立派なもので、通常ならば三役昇進が望める成績であるが、今場所は三役から陥落する力士がいないので残念。

西 3 枚目の明生は、正代・貴景勝も破って 10 勝 5 敗を上げた。低い姿勢を保ち、脇を固めた攻めは力強い。いくつかの怪我に悩まされた日々を乗り越えて、着実に力を付けて来ている。ここ数場所は低姿勢について叩かれることもなくなったが、下半身の体型を見ると豊富な稽古量の上の安定感と見ることができると、技能派力士だった師匠(立浪:元旭豊)の影響を感じる場面がいくつか見られた。

西 2 枚目の若隆景は新入幕から 5 場所目の 27 才。182cm 127Kgと、大型力士が多い今ではどちらかと言えば小兵の部類に入る。正攻法で正面から攻めていく相撲のスタイルは見ていると気持ちが良い。激しく動きながらも低い姿勢が保たれたまま、相手の出方に応じて様々な動きを繰り出すのは面白い。序盤は上位力士との取組で星が上がらなかったが、中盤で 7 連勝した上、優勝の行方を左右するような働きをして 10 勝 5 敗。若隆景同様に、低い姿勢を保ちながら、多彩な技を繰り出して相手を翻弄する翔猿の相撲も光っていた。新入幕で大活躍し上位に躍進したが、跳ね返されて二場所経過。幕内上位を保てる力がついてきたように感じる。

自己最高位の西 3 枚目に躍進した志摩ノ海は、4 勝 11 敗と跳ね返されてしまったが、脇を固く締めたおっつけと、上げない頭は対戦相手にとっても脅威になってきている。いずれは上位の壁をぶち破る日が来るだろうと期待している。

#### ◆ここが見所か・・・なるほど

このところ数場所の観戦結果、相撲解説者の指摘事項を思い出して羅列してみた。今場所活躍した力士の相撲を思い浮かべて見ると、「ナルホド」と思えるものがある。

- \*立ち合いは低く鋭く踏み込むべし
- \*膝を曲げて低い姿勢を保ち、身体の安定性を保ちつつ、相手に前進圧力を加えるべし
- \*顎を引いて、頭を上げずに進むべし
- \*脇を固めて、まわしは可能な限り浅い位置を引くべし、前みつはなお良し
- \*まわしは引いたらすぐに引きつけるべし
- \*上手は引いたら脇をさらに固めて引きつけるべし
- \*突き押しは手だけでなく、足の運び(腰の移動)を伴うべし
- \*足の運びは、足裏全面を土俵に着けて、すり足で行くべし

#### ◆ポスト白鵬を占う

さて、照ノ富士の大関復帰が決まることになると、次には「綱取り騒動」が予想される。

「来場所も優勝することがあれば・・・」などなど、マスコミの報道はもう有頂天状態が始まっている。来場所は本人の意思以上に騒動が先行して、本人を惑わす結果にもなるだろう。

さらに、今場所小結で 10 勝 5 敗をあげた高安は関脇に昇進(復帰)することになる。優勝争いの先頭から見事に脱落してボロクソに書かれたが、「小結で 10 勝 5 敗は、ここを起点とした大関取りのスタート」との解釈が先行して、これまた騒動が始まるに違いない。

霧田気先行、瞬間最大風速の白星数重視で昇進を急ぐことなく、内容を重視した評価に力を注ぐようにしてもらいたいと思う。

白鵬引退後を想像してみると……。

大関は 4 人か 5 人そろえたのだが、毎場所誰かが負け越してカド番になり、誰かが関脇に陥落して、誰かが特例で大関に復帰して……。新たに小結・関脇で優勝した力士が大関昇進を果たすのだが……。

というようなことを繰り返すことも考えられる。

大相撲の原点に戻ってみれば、最高位は大関で、その中(大関)から「品格」「力量」ともに群を抜いている者に「神の地位」を与えて「綱をつけさせる」という考え方があった。そう考えて見れば「横綱不在」が続くことも不自然なことではない。

「品格・力量抜群な大関を目指す力士がいること」が大前提で、「品格・力量抜群な大関の登場を待ち続ける」ことで生じる「横綱不在」は、無駄なことでもないような気がする。

以上